

人・まち・環境の未来を考える

研究会2010

つながりの原点としての家族を考えることが、今回の特集テーマである。本稿では、つながりをコミュニケーションととらえる。家族のコミュニケーション問題を検討するにあたり、最近、筆者が経験したことから話を始めたい。

今年（平成22年）に入り、筆者は「人、まち、環境の未来を考える研究会2010」という集まりに参加した。日ごろ感じている素朴な疑問（もやもや感）を取り出し、ディスカッションしようというのが、研究会の趣旨である。自由な議論を通じて、人、まち、環境の未来に関して、何か気づきを得ることができれば、という目的意識を持ち、弊社内メンバー6名と事務局で研究会が立ち上がった。

全4回、うち2回は外部のゲストに加わってもらい、会を進行した。結果、事務局のとりまとめで10の切り口を抽出し、それを1枚のMAPに落とし込んだ（もやもやMAP、次ページ）。結果的には、多くが人と人とのコミュニケーションに関わるテ



マであった。

その中でも、家族と関係するような話題がいくつか取り上げられた。本稿では、そこでの議論をヒントに、「つながりの原点としての家族」を考えてみることにしたい。ただし、以下の考察はあくまで筆者の見解であり、研究会とは切り離されたものであることはご了承願いたい。

もやもやMAPから

1 衰える身体知・想像力

〜体も心も頭も、使わへんから退化してしまう〜

自分の子どもを心配してかけた言葉に対する、子どもからの反応が「大丈夫だよ」だった。しかし、その根拠は全くなく、実際には「大丈夫」ではない。このような事例が紹介された。家族を心配するという、本質的なコミュニケーションがうまく機能



つながりの原点としての家族

〜共感、相互依存認知、責任〜

豊田 尚吾

Written by Shogo Toyota

していない。といって、親子関係が悪いわけではない。子どもは自分の問題を、自分で解決することを選択している。家族に相談したり、頼ったりすることが最善だとは思っていないだけなのである。

かつて個人が直面する問題の多くは家族の協力で解決し

てきた。しかし今日、様々な“道具”が家庭外に出現し、存在感を増しつつある。勉強であれば、学校はもちろんのこと、塾、参考書、インターネット、補習授業など様々だ。そうなること、家族の持つ、教育や保護といった機能は、ある程度それらで代替されてしまう。

このような状況の下、私たちは自分独自の領域をつくるようになり、そこには家族であっても関わらないで欲しいと拒否するようになる。ただし、これは子どもに限ったことではなく、大人（夫婦間など）でも同様である。戦後の、あるべき家族像についての基本理念は「個人の尊厳と両性の本質的平等」であったという（望月1996）。「家族のための個人」から「個人のための家族」へ転換する中で、各人は、独自の領域と、家族で共有する領域の二つがある、との意識を持つようになった。そして、その共同領域で協力し合う状況を「個人化」という。しかし、その個人化が安定していないことが問題なのである。

実際、家族の外側、即ち市場などで手に入る各種サービスを利用すれば、人に頼ることなく解決できることが増え、家族内の共同領域を小さくすることができるようになる。共同領域を維持するための精神的、時間的コストが大きければ、共同部分は小さくなっていく。結果として、家族とのコミュニケーションの機会が減り、自分独自の領域が相対的に広がっていく。

それが即、間違いだとか、悪だとかいうわけではない。しかし、個人化の望ましい姿が不明確なまま、バランスを欠いた状態で家族の共同領域が縮小し続けることは問題だ、との意識を持つことは必要であろう。

2 子どもと私の距離感の変化 くなんでもそないな子育てやねんく

子どもに対する虐待を報じる記事に心を痛めている人も多い

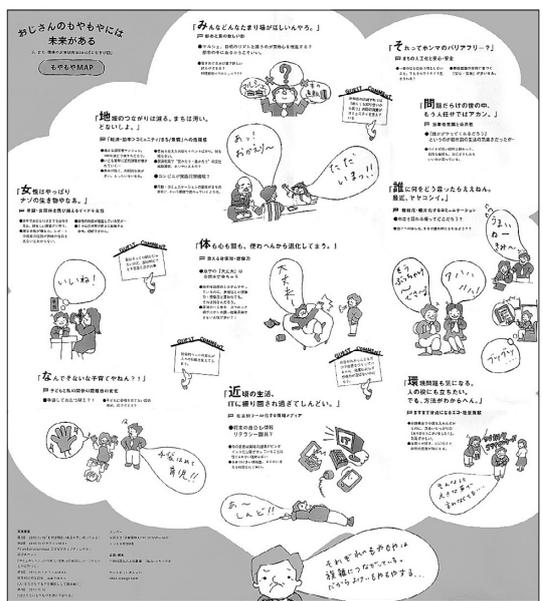
はずだ。実際には昔から虐待まがいのことは今と同様に、あるいはむしろ多く存在していたのかもしれない。昔はよくて、今が悪いということではない。

しかし、数の問題ではなく、内容に関して、昔と今では異なった状況があるのではないだろうか。事例として、自分の赤ちゃんのおむつ換えの際に、手袋をするという話があった。

これは自分自身と乳児の距離感をどう取るかという問題である。手袋をするという行為自体はたいしたことはないが、そこに親と子どもの一体感、あるいは健全なコミュニケーションはあるのだろうかという疑問を持つ。依存するしか生きる方法のない赤ん坊を、親が他者として認識している。そのことが乳児に対し、どのような情動的影響を与えるのであろうか。

昔は家族というヒエラルキーの中、発言力のない子どもにも対する虐待が存在していた。それに対し、今は親と子どもの距離感の取り方を知らないことからくる不適切な態度が問題を引き起こしているように思う。

これも前項と同様に、家族の中での個人の領域と、共同領域の設定の仕方、バランスの取り方の問題であろう。そのような共同の領域が小さくなることによって、人との直接的なコミュニケーションを通じて感じ取ることのできる智慧の蓄積が疎かになり、想像力の豊かさ醸成にも望ましくない影響が及ぶのではないだろうか。



もやもやMAP(片面)

3 社会的ツール化する情報メディア 〜近頃の生活、ITに振り回されすぎてしんどい〜

ICT (Information and Communication Technology) の発展はめざましく、TwitterやUstreamほかの人が使いこなしている。これらのコンテンツは基本的にフローの情報であり、日々大量に流れていく。それは鮮度が命であり、人によっては時代の流れについていかなければならないという、焦りを感じるようになる。

現在、情報はネットワークの中に大量にある。使いこなすのも比較的容易で便利である。そこでは従来知ることのできなかつた知識を得る機会が存在する。しかし、そこで本当によい出会いが生まれる確率はどの程度あるのだろうか。鮮度という価値を持った情報が得られることは間違いない。もしかしたら、地球の裏のとても素晴らしい情報を、入手することができるかもしれない。

しかし、現実には鮮度という価値”しかない“情報を、流れるように消費していつている場合が多いのではないか。そこから価値のある情報を見つけ出したり、自ら創り出したりするのは、また別の能力なのである。

ICTを”活用する“多くの生活者は、流れについていくことに精一杯で忙しい。家族のコミュニケーションを通じて得られる情報は本来、心がこもっていて深みのある、ストック情報であることが多いはずだ。理念的、抽象的といつてもいいかもしれない。もはや家訓などはほとんどの家庭で存在しないかもしれないが、その家独自の伝統、文化、倫理観などはあるはずだ。

しかし、それは古くさい。忙しい流れの中ではノウハウとして、そのままでは使いにくい。本当はそこに自分なりの工夫を加えれば、無限の応用可能性のある智慧であるにもかかわらず、ハウトゥではないので手軽に利用できない。

しかし、家族のコミュニケーションの中から生み出される情報は、現在急激に普及しつつある情報ツールとは異なる価値を生み出す、含蓄と深みのあるモノであるように思う。

4 「経済・効率」＜コミュニケーション／まち／景観＞への危機感 〜地域のつながりは減る。まちは汚い。どないしよ〜

あるコンビニでは、家族の代替機能を果たすことを目指しているそう。コンビニの店員さんに「お帰りなさい」と言われたら、どんな気持ちになるだろうか（実際にそう言われるかどうかは分からないが）。メイド喫茶でもあるまいし、多くの人は違和感を持つのではなからうか。

しかし、何度か一人暮らしをした経験をもとに言えば、コンビニが自分の生活に最も近い存在であったことも確かである。コンビニは文字通り便利だ。その意味で、家族の持つ”機能のいくつか“を代替できるという考えは理解可能だ。一方で、家族（そのもの）の代替機能を目指すといわれると違和感がある。この違いは何であろうか。

恐らくその違和感の部分が、コンビニでは代替できない、家族の本質なのだろう。店員さんが、従業員（アルバイト）であり、ずっとそのコンビニにいるということが期待できない以上、長期的な人間関係を前提にはできない。店内で丁寧な言葉をかけられれば、一瞬の癒し効果はあるかもしれない。しかし、それはその場限りのことである。そして、より本質的なことは、個人とコンビニとの関係は一方通行であって、相互依存関係ではないということだ。

一方的な依存と、そのサービスに伴う対価を金銭で精算するのであれば、いわば執事と主人との構図となる。やはりコンビニでの「お帰りなさい」は、家族よりもメイド喫茶に近いであろう。人が相互依存関係から学ぶことは多いはずだ。お互い様、それ

は友人関係や仕事でも同様である。しかし、多くの人にとって、依存関係の初体験は家族である。即ち、いずれ経験する、友人との、あるいは社会の中での相互依存関係を円滑に運営するための訓練として、家族の中での体験がすばらしいものであることが望まれるのだ。

持続可能な社会をつくる際の家族の役割



10のテーマの中の4つを取り上げてみた。これらはいずれも問題提起にすぎず、必ずしも解決策を提示することを目的としたものではない。MAPをつくったと述べたが、これは議論を広げるためのコミュニケーションツール、との位置づけである。とはいえ、いくつかの展望は示している。

第一は、期待収益力を超える「志」を流通させる仕組みの構築である。環境問題や少子高齢化問題を見れば明らかのように、単に市場機能や、持続可能性に問題を抱えている「公」に頼っているだけでは、豊かさを実現できない。社会の基盤である生活者や企業などのステイクホルダーが、主体的な責任意識と責任能力を持ち、課題に積極的にコミットしていくことが必要である。

市場原理が期待収益（損得）で物事の善悪を判断するように、正邪の判断を支援する価値観が明確になることが必要である。その芽は方々に出ているように思われる。

そして、その価値観の醸成の部分で、家族の果たす役割が大きいと考える。なぜなら前節でも述べたように、家族とのコミュニケーションを通じて、WINWIN関係の重要性、相互依存関係に対する感謝の気持ちが育まれるからである。

第二に、選択と決定に納得できるプロセスが必要であるということだ。市場という見えざる手、即ち個人の便益の判断を集計した選択は重要である。しかし、それと共に、市場機能とは別の、

他者への配慮を加味した政治的判断が今後の社会の行く末を左右する仕組みになるはずとの考えが背景にある。

政治による正義の実現などはきれいな事に聞こえるかもしれない。しかし、そのような本来の政治が持つ目的と方法論を理解し、それを実現しようという高い志を持った層の出現は夢物語ではない。

その部分でも、家族の持つ機能が有効ではないだろうか。即ち、家族間で共同領域を持つことで、他者の気持ちや考えに共感する能力を培うことができる。このような共感が他者配慮へとつながり、それが健全な形で民主主義的決定、選択に反映されることで社会の健全性が保たれるのである。

つながりの原点としての家族

これまでに紹介した研究会での議論、それから派生した考察を踏まえ、改めてつながりの原点としての家族を考えてみたい。言うまでもなく、家族は人が生きるための装置として、物心両面において必要な「仕組み」であった。複数の人々が支えあうことによって実現可能な機能がある。それを享受するための最小単位として家族があった。

家族の機能として大橋（1993）は、表のようなまとめをおこなっている。同様にオグバーンは、家族が経済、地位付与、教育、保護、宗教、娯楽、愛情の機能を果たしていたと述べている。



(表) 家族機能

機能種別	対内的機能	対外的機能
固有機能	性愛機能 生殖・養育機能	性愛統制 種保存(種の再生産)
基礎機能	居住機能 経済機能	{生活保障 労働力再生産
副次機能	教育機能	文化伝達
	保護機能 休息機能	心理的・身体的安定
	娯楽機能 宗教機能	
	地位付与機能	地位付与機能

出所)大橋(1993)p. 171

それが経済の発展により、その機能の多くを市場で調達することが可能になった。また福祉社会の実現により、行政やNPOがその役割を果たす場合もある。

これらのことは、あらゆるところで既に論じられてきているものの、やはりそれが家族の独自機能を代替し、その代わりに家族の持つ影響力を減じてきたことは否めない。生活経営的視点で見ても、吉野（1984）では、「生活資源の源泉」を提供する各主体（個人、家族、地域、行政、市場）の中では、将来的に家族のシェアはますます小さくなるであろうと展望している。

とはいえ、ほとんどの識者は完全に家族の機能が消滅するなどは考えていない。依然として独自の機能を持つ、あるいはまた違った役割を持つことが主張されている。パーソンズの機能明確化論は①子どもの社会化と②成人のパーソナリティの安定は家族の独自の機能だと主張する。

また、山田（2009）は個人のアイデンティティを保証する機能（自分をかけがえない個別的な存在として承認する、されること）を、家族以外が代替することが難しい機能として挙げている。これはパーソンズの①②にも通じる論点であろう。

一方、家族の持ちうる新しい機能として、ブラッドは夫婦の伴侶性の機能や精神衛生機能を指摘しているが、以前の家族にもそのような機能は存在していたので、必ずしも新機能というわけではないと考える。新しい機能ではないが、家族の持つ経済的機能が今までより軽くなり、むしろ愛情機能にバランスがシフトするとの見方もある。そこでは必要な機能の、最終的な「責任」を依然として家族が持っている、あるいは家族以外は持ち得ていないとの理解が基礎となっている。

その結果、家族が持つ機能には、他の主体では持ち得ない「第一次的福祉志向」（森岡清美）という特徴があると主張される場合もある。確かに、家族の「最後の砦」的な存在感は代替不可能

な特徴として維持されるのかもしれない。

家族の機能論とは別に、神野（2010）は、家族のようなインフォーマル・セクターは、特定の目的を遂行するために組織された集団ではなく、集まること、それ自体を目的とした帰属集団であると表現している。

共感、相互依存認知、責任



では、今後10年程度を展望したとき、家族がどのような形で社会の仕組みとして機能していくのか、あるいはいくべきなのかを考えてみたい。家族像の将来に関する、ひとつの関心は通い婚や婚外子など、新しい家族の形の問題であろう。しかし、10年程度では、急進的な家族形態が日本において大きな社会問題になるほど、爆発的に増えるとは予想しがたい。本稿の視野は10年程度先までと考えているので、家族形態の問題は基本的に多様性を尊重するという姿勢を示すに止めておきたい。

むしろ、従来からの家族が様々な機能を代替され、縮小しつつある現状をどう理解するべきかという論点に絞って考えてい。「もやもやMAP」を用いた検討も踏まえると、筆者は家族が他の主体よりも、比較優位を持つて提供できる機能で、共感、相互依存認知、責任という3つが重要なのではないかと考えた。個人だけでなく、他者と生きる中で共同領域の設定と運営が必要となる。その中で、相手の立場に立つて考え、行動することの必要性に迫られ、共感する能力が醸成される。また、家族内で相互に依存している事実を知り、実際に経験することで他者に対する感謝の念が育まれる。そしてそれは家族を越えて、社会の中での相互依存関係に敷衍される。

そのような中、自分の役割が明確になり、責任が意識される。森岡が言うように、最後の砦は家族であり、そこにこそ、人間の

尊厳を守り抜く責任が所在する。Responsibilityとして表現される「責任」とは、反応・応える (response)、能力 (ability) の存在を示している。即ち、責任を取るには能力が必要であることを意識させられるのである。親になった時に感じる自覚の意識こそ、基本的な責任意識の芽生えといえよう。

このような共感、相互依存認知、責任という精神的成長は健全な家族があつてこそ育まれる。健全な家族とは、個人領域と共同領域のバランスが取れ、構成員は自らの役割を認識し、相互のコミュニケーションが円滑に取れているような家庭である。

これは単に子どもだけを対象にしているのではない。変化の激しい今の時代は、大人になっても日々、成長していくことが必要である。その時、家族を基盤として、共同意識を持ち、相互依存関係に感謝し、社会的な責任を意識して行動するという姿勢は、新しい社会に不可欠の礎となるはずだ。

最後に神野(2010)について紹介しよう。神野は「分かち合い」の概念を重視し、市場社会を競争原理に基づく市場経済と、協力原理に基づく分かち合いの経済(共同経済)から成り立っていると考える。そして「分かち合い」の原理を3つの要素から構成されているとし、「存在の必要性の相互確認の原則」「共同責任の原則」「平等の原則」を提示している。また、分かち合いの組織の源基形態は家族であるとし、家族は協力原理に基づくと明言している。

見識において足元にも及ばないことは承知しながらも、基本的な認識に重なる部分があるように感じた。

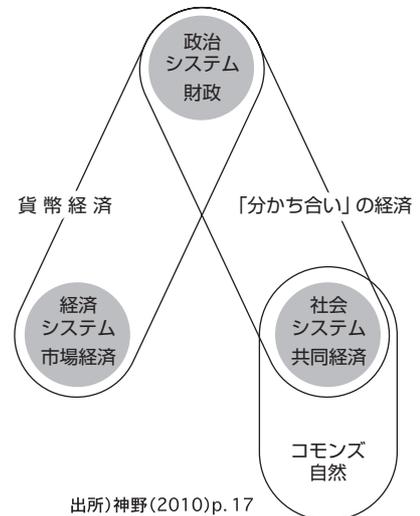
当然のことながら、このような分かち合いの原理の重要性を理解し、いかにして実現可能性を高め、現実に反映していくかを見いだすことは容易ではない。しかし、何らかの形でブレイクスルーすることができた場合には、違う形の価値観と、家族像、ひいては別の(オルタナティブな)明るい社会像が見えてくるのではないかと期待するのである。

（大阪ガス㈱エネルギー文化研究所 研究員）

■ 参考資料

- 大橋薫(1993)『家族社会学の展開』石原邦雄他編集、培風館
- 橋本俊昭・木村匡子(2008)『家族の経済学』N T T出版
- 神野直彦(2010)『「分かち合い」の経済学』岩波書店
- 日本家政学会(2010)『暮らしをつくりかえる生活経営力』朝倉書店
- 望月嵩(1996)『家族社会学入門』培風館
- 山田昌弘(2009)『家族を越える社会学』牟田和恵編、新曜社
- 吉野正治(1984)『あたらしいゆたかさ』連合出版

(図) 市場社会のサブシステム



出所)神野(2010)p. 17